

春告草

第136号 平成31年3月25日 進路指導部発行

苦しい時が成長する時

4期生が卒業していった。難関国立大をはじめ、難関私立大にも多くの合格者を出すことができました。これまでに3回卒業生を出し、校内の受験指導体制が整ってきていることもあるが、何よりも3期生までの先輩方の進路実績をみて、一人一人が自信をもって受験に取り組んでいったことが、難関大合格に結びついたのであると感じている。目標を高く掲げ、強いハートを維持して取り組んだ結果が進学実績の数値である。受験体験記の執筆を依頼した卒業生からは原稿が集まりつつある。来年度進路指針への掲載を予定しているが、寄稿された原稿の一部も引用しながら、今年の大学入試について、私立大を中心に大まかに振り返っておこう。

試験日に照準を合わせて間に合わせればよい

難関私立大は志願者を大きく減らした。一般入試の志願者数では、早慶は6.5%、SMART+CHは5.0%減少した。強い現役志向に加え、入学定員の厳格化が影響したことが「志願者減」に結びついたと考えられるが、「行きたい大学」ではなく「入れる大学」選びは、実力を十分に伸ばしきれないことにもつながり易い。

「5年の12月に初めてセンター模試を受けたが、その結果は予想よりもかなり低く、数学ⅠAが46点、ⅡBが47点という始末だった。でもこの模試のお陰で、本格的に受験勉強を始めよう」と決心した。(早稲田・商合格)」

現在の学力的立ち位置を知り、志望校合格までどのようにつなげるかが受験勉強である。

下表は今年の入試状況を大学グループ別にまとめたものだが、一般入試の志願者を減らした難関大に対して、中堅各大学は志願者が増えた。個別に見ていくと、駒澤大9.1%増、成蹊大18.4%増、専修大22.5%増というデータもある。

大学グループ別入試状況

大学グループ	センター利用除く		センター利用方式		合計	
	志願者数	昨年比	志願者数	昨年比	志願者数	昨年比
早慶	134,662	93.5%	18,551	112.7%	153,213	95.5%
SMART+CH	357,728	95.0%	176,954	101.4%	534,682	97.0%
日東駒専	174,177	100.2%	116,810	98.7%	290,987	99.6%
成成明学獨國武	80,538	101.0%	55,469	107.5%	136,007	103.5%
東芝電工	64,513	113.8%	54,508	120.1%	119,021	116.6%
主要女子大	24,110	101.7%	17,837	112.3%	41,947	105.9%

早慶:早稲田、慶應 SMART+CH:上智、明治、青学、立教、理科大、中央、法政 日東駒専:日大、東洋、駒澤、専修
成成明学獨國武:成蹊、成城、明学、獨協、國學院、武蔵 東芝電工:東京都市大、芝浦工大、電機大、工学院
主要女子大:津田塾、東京女子大、日本女子大、京都女子大、同志社女子大 ※データは大学通信調べ

模試で良い判定が出ないと、弱気になって志望校を下げてしまう傾向がある。しかし、下げたところで高倍率は避けられないのである。

「模試で一橋はE判定しかとったことがありません。それでも自分のやり方に自信を持ってやり通すことが大切です。ホントの勝負は試験日なので、そこに照準を合わせて間に合わせれば良いのです。(一橋・経済合格)」

これから受験を迎える5年生はもちろん4年生も、この言葉を胸に刻んでおこう。試験日に間に合わせることができれば良いのです。

私大志望でもセンターは5教科受験する

センター利用方式の志願動向を見ると、こちらは早慶(ただし、慶應はセンター利用未実施の為、早稲田)も含め軒並み志願者が増えた。このため私大のセンター利用入試は高得点での競争となった。推薦入試やAO入試などの影響で、一般入試の募集人員が減ったこともあり、思わぬ苦戦を強いられた受験生も多かった。

成蹊大は今年の入試で志願者が大幅に増加したが、中でも経済学部は44.2%と激増した。表中のC方式がセンター3科目(国+英+1科目)受験のタイプで志願倍率は72.0倍である。P方式はセンター5科目+独自試験(英語)のセンター併用方式で、志願倍率は19.7倍と控えめ(?)である。単純に比較はできないが、受験科目数が多いと倍率は低くなる。

成蹊大学経済学部センター利用入試状況

	募集人員	出願者数	昨年度
C方式	40	2,881	1,475
P方式	15	296	128

「(私大志望だが)センター3教科型入試は倍率やボーダー得点率が高いため、数学と理科を含む5教科を勉強した。回り道をしていると思うこともあったが、滑り止め校としていた明治・法と中大・法はセンター3教科型では不合格だったが、5教科型では合格していた。(早稲田・法合格)」というメッセージもある。早稲田受験の前にこれらの合格が分かったので、落ち着いて第一志望校の受験に向かえたと感想を述べている。

文高理低にかげりが見え、女子大復活の兆し

受験プラン作成にあたって、女子大を入れるよう女子生徒にアドバイスすることが多かったが、今年は少々状況が異なったという感が強い。

就職の面倒見が良いことに加え、良妻賢母や一般教養を重視してきた女子大が、資格取得型に変革し、現在はビジネス系や国際教養系に力を入れ、再評価されていることが大きい。また、郊外にあったキャンパスを都心キャンパスを整備して再集結させた女子大も復権の兆しがある。

志願動向でもう一つ注目するのは、理系人気だ。これまでは文系に人気が集まる「文高理低」が続いてきたが、「東芝電工」は16.6%も増加し、千葉工大、芝浦工大などは志願倍率ランキングでも上位にランクインしている。ビッグデータやAI、ICTに秀でた人材のニーズが高まり、これらを学べる情報系や電気電子系の学部が人気を集めている。

自分に合ったやり方を見つけ学習効果を上げる

毎年恒例となった受験報告会が3月19日の午後、5年生を対象に行われた。集まってもらった卒業生は8名。後輩たちへ良いメッセージを伝えようと、事前に打ち合わせを自主的に行ってくれたことが嬉しかった。受験エピソード、その大学を選んだ理由、センター試験、勉強時間とその内訳、息抜きの方法、受験にあたって最も大事なこと、部活との両立、塾の利用、モチベーションの保ち方、科目別アドバイスなど、話は多岐にわたった。「勉強のやり方は自分に合ったやり方を見つけ、それをやり通すことが大切」ということは、分かっているけれども長い受験生活では結果が出ないと弱気になったりするものだ。体験記の原稿にも「苦しい時が成長の時だと思いつつながら、耐えて勉強するのが一番(大阪大・基礎工合格)」、「受験において自信を持つということは非常に大事です。…私の場合は勉強量を自信につなげました(早稲田・社会科学合格)」などのメッセージがあった。

5年生はこれから長い受験生活が始まるが、決して一人ではない。一緒に進路実現に向けて頑張っている仲間がいることを忘れずに取り組めると元気が湧いてくるだろう。新学期になれば行事もあるが、仲間と力を合わせてやることが、その後のパワー源にもなる。

さあ、頑張ろう！

平成31年度大学入試 主要大合格状況

国公立大		私立大	
北海道大	3	早稲田大	32
筑波大	3	慶應義塾大	13
埼玉大	1	上智大	14
電気通信大	2	東京理科大	22
東京大	4	青山学院大	11
東京医科歯科大	1	中央大	31
東京外国語大	3	法政大	23
東京学芸大	3	明治大	54
東京工業大	2	立教大	8
一橋大	3	学習院大	5
横浜国立大	1	自治医科大	1
大阪大	2	※現役生のみを集計で、 国公立大後期試験は含まない。	
首都大学東京	5	2019.3.20 現在	

4期生の大学受験を振り返る

4期生担任 進路指導担当 福島華代

4期生は男子84名、女子74名と男子が多い学年だった。提出物を出さない、自分勝手な行動する、遅刻が多い…など担任としてはイライラすることも多々あったが、行事や部活に情熱を燃やし、一致団結して楽しみ、仲間意識が強い学年で、若いエネルギーを強く感じた。学校大好きという生徒が多く、センター試験後もたくさんの生徒が登校し勉強していた。中には「徳を積む」と言っており、受験直前期に教室の清掃、ゴミ捨てをして運を引き寄せようと企てた男子生徒達もいて、最後は友情とパワーで受験期を乗り越えたように感じる。

5年後半

受験をどこかで意識しつつも、鷹校祭、台湾修学旅行、部活、生徒会など、学校の中心の学年として、さまざまな場面で活躍する姿が見られた。この時期はまだまだ、受験勉強というよりも授業中心の勉強で、部活動や行事にも全力投球していたが、そろそろ志望大学が固まり、この時期に決めた第一志望を最後まで貫いて受験した生徒が多かった。

12月末に西湖で勉強合宿を行った。教科によっては授業の先取りや演習が行なわれたが、センター試験用の問題を解き、実力を確認し、空き時間には計画的に自習を行い、早朝から夜間まで熱心に勉強した。そして年明けのセンター同日模試あたりから、受験生としての意識が本格的に出てきたように思う。

6年1学期

この時期までには、塾に通う生徒や、部活を引退する生徒が増え、本格的な受験勉強に突入した。塾に行く、行かないは、それぞれが決めればよいことだろう。必要だと思えば塾に行くことも大いにありだが、決して行かなくてはならないということはない。ちなみに、東大合格者4名のうち3名は塾には通わなかった。部活動と受験勉強との両立は大変だが、部活を最後までやりきったという達成感はその後の受験勉強にも良い影響を与え、すぐに受験勉強に切り替えることができていた。6月に行われた合唱祭では、練習時間がそれほど取れない中、期待以上の演奏を披露し、学年担任団を感動させてくれた。集中力と、やる時はやるという4期生の力強さを感じることができ、そのパワーは受験期まで持続していたように思う。

1学期後半には、東大、東工大、一橋大志願者を集めてのレクチャーを行った。その後も定期的に集まり、模試の日程などの情報や勉強方法を共有した。このチーム作りは大きな効果があった。お互いを意識しながら、最後まで志望を変えず受験をした生徒が多く、結果的には早慶上智理科大等、難関私立大の合格にもつながった。

6年生になると毎月模試が行われるが、模試の結果に一喜一憂せず、苦手分野を確認することができると効果も大きい。また、最初から受験科目をしぼった私立型受験の生徒もいたが、国公立型受験者が多いのも三鷹中等の特徴である。6年生のこの時期以降、国公立型から私立型に変更した生徒はわずかで、むしろ第一志望の国公立大学に合格できなくても、併願した難関私大の合格を勝ち取っていた。

6年夏休みから2学期

夏休みに入ってすぐに三者面談を行った。この時に決める第一志望校は最後まで変えずに貫いていって欲しい。併願校については「青学理工だから渋谷にあるのだろう」と思っていたら、実は相模原だったというように、学部によってキャンパスが違っていたり、同じ学部名でも学校によって内容が異なるので、幅広く情報を集めておいたほうが良い。夏休みは夏期講習などに参加して、計画的に勉強しよう。中には一日15時間などという強者もいたが、これだけの長時間、勉強を持続するのは意外と難しい。学校や塾の自習室をうまく利用し、10時間程度を目標に毎日継続していきたい。勉強の成果がすぐに表れず、辛い時期でもあるが、難しい受験問題を解くより、基礎力の強化や苦手科目の克服に重点を置くべき時期である。現役生は基礎力があれば、入試問題対策は直前で十分に間に合う。

2学期が始まるとすぐに鷹校祭。6年生は短い準備期間にも関わらず立派な発表を行い、一人一人が楽しんでいた。サッカー部のように引退が遅かった生徒も、この時期は遅れを取り戻すべく猛烈に勉強していた。一方、2学期に入っても受験勉強のペースをつかみ損ねた生徒は、そのまま受験に突入し、思うような成果をあげられなかったように思う。

2学期で大切なのは積極的に外部模試を受けることである。校内で行う模試と問題のレベルが違う模試を受けることの必要と共に、外部で他校の生徒や浪人生と同じ会場で受験する経験を積むことが大切である。普段緊張しそうなにもない生徒が、受験本番であがってしまい、思うような成果を出すことができなかったという話も聞いている。河合塾や駿台の記述、マーク試験だけでなく、東大模試など大学別模試を受けよう。この時期の模試でA、B判定が出れば自信につなげ、仮にC、D判定でも、まだまだ実力が足りないと感じ、モチベーションを高めるきっかけになれば良いのだ。

受験期

秋になると推薦入試やAO入試などが始まる。4期生はこの時期に指定校推薦1名、私立大の公募推薦で2名が進路を決定した。その他合格した生徒もいたが、併願OKの学校のため受験勉強は継続していた。この時期の推薦、AO入

試は受験機会を増やすメリットはあるが、準備のために時間をとられるうえ、不合格であったときの精神的なダメージは大きい。安易に推薦、AO入試を考えてはいけない。一般入試に向けてしっかり勉強すべき時期である。

11月末から12月上旬には、出願プランの作成について二者面談を行った。国公立大学を第一志望とする生徒の多くは前期だけでなく後期受験までを視野に入れていた。私大についても、センター利用試験も含め、この時期に出願校を決定する。

今年はセンター試験の日程がこれまでで一番遅かった。そのため、3学期の授業が例年よりも長く、英語、リスニング、青バックを中心にセンター対策を行った。空き時間には、それぞれがセンター試験を中心に勉強していたが、センター試験後、私大入試まで時間がないこともあり、各大学の赤本を解いている姿も見られた。センター対策と国公立2次や私大対策をバランスよくやっていたようだ。男子が多い学年でもあり、3学期の体育の授業を何よりも楽しみにしている生徒もいて、インフルエンザが流行する時期でもあったが、元気に乗り越えることができた。

センター試験後は、教科ごとの講習や個別指導が行われた。この時期は、塾の自習室に通い学校にほとんど来ない生徒もいたが、例年通り、朝から夜遅くまで、教室、図書室、3講、会議室、自習室、極寒の秘密空間(?)など自分なりの勉強空間を見つけ、進路室の赤本を借り、過去問対策を中心に学習していた。小論文や記述試験対策などを個人的に指導してもらっていた生徒もいた。同じ大学を志望している人や気の合う仲間と一緒に勉強していたのも、本校ならではの気がする。勉強の合間におしゃべりしたり、昼食を一緒に食べたりしながら集団で受験を乗り越えたという印象だ。

入試を終えて

予定通り第一志望に合格した人、第一志望はだめだったが結果的に抑えの難関大学に合格した人、併願校には合格したけれど浪人する人、残念ながら全落ちした人など、結果はさまざまだ。希望の大学に合格した人には「おめでとう」、残念ながら希望が叶わなかった人には「よく頑張りました」と声をかけるが、やはり受験は「〇〇さんなら絶対合格する。〇〇大学なら大丈夫」という甘いものではないというのが正直な感想である。

今年のセンター試験は、前年と比べて国語の平均点が上がり、文系・理系とも平均点は高く、私大センター利用試験のボーダーが上昇した。そうした中でも、センター試験で満足のいく成績を残した生徒は、その後の試験でも好調を維持し、精神的にも安定して受験を乗り越えていった。基礎力を養い、まずセンター試験を突破することが大切だ。

これまでわかっている入試結果(※)は、東大・文三2名、理一2名、一橋大3名、東工大2名、自治医大1名、早稲田大32名、慶應大13名、上智大14名、東京理科大22名などである。早稲田、明治は昨年度より合格実績を伸ばした。文系は東大、一橋大をはじめ早慶上智、GMARCHに多数合格者を出し、例年どおりの安定した結果を残した。理系は、数学に強い4期生という言葉通り、現役で初めて、東大理科、東工大に合格者が出た。その他、早稲田6名、慶應3名、上智1名、理科大19名、旧帝大では大阪大2名、北大3名など、素晴らしい実績を残した。

受験生の二極化が言われているが、本校もその傾向がみられる。上位層は複数の大学に合格し、たとえ第一希望はだめでも着実に難関併願校には合格した。昨年と比べて理系大学は難易度に大きく変化はなく、全体的にGMARCHの合格者数は前年度と比べて遜色はなかった。しかし文系は、GMARCHおよび中堅大で、入学定員の厳格化で合格者を絞っている影響を大きく受けた。特に女子大志願者は苦戦を強いられたという印象が強い。「センター試験で目標点に達したが、ボーダーが上がり、押さえと思っていた大学は不合格。さらに絶対大丈夫と思っていた女子大は合格者絞り込みの為に補欠合格。そして本命のGMARCHは倍率が高く不合格。あわてて3月入試を受験するものの、なかなか合格できない」という事例があった。

また、「GMARCHは1勝7敗、早慶は3勝1敗」という事例もあった。GMARCHは倍率も高く激戦傾向で、対策が不十分だった受験生にとっては厳しい結果となった。GMARCHくらいなら…という軽い気持ちは禁物である。私大受験でも健闘を見せたのが国公立文系志望の生徒で、最後まで国公立型の勉強をしながら、結果的に早慶に合格し、進学した例もあった。教科数が多いことは決して不利にはならない。

受験勉強で何よりも大切なのは、まず質そして量である。勉強しないで合格した生徒は一人もいない。しかし、十分に勉強し、実力もあるのに「受からなかったらどうしよう」という不安な気持ちから、プレッシャーのあまり落ち込み、弱気になってしまい、思うような結果が出なかった人もいる。最後まで目標を変えずに、のびのびと受験期を過ごしていた人のほうが良い結果を出せたように感じる。

新テストを2年後に控え、各大学で入試改革が進められている。新テストでは記述問題が入り、入試の問題傾向も変わりつつあるが、国語力の優れた三鷹中等生にとって不利になることはないと思われる。

望みを高く掲げ、希望の進路を目指して欲しい。

(※大学合格者数は、3月20日現在の数値で、国公立大後期試験の合格者は含めていない。)